

学習支援ボランティア学生と派遣校教師との連絡体制への課題 ～テキストマイニング分析を通して～

山本 真由美・大橋 眞・境 泉洋・岸江 信介・石田 基弘
(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)

1. はじめに

2003年3月に学習障害(LD)、注意欠陥/多動性障害(ADHD)、高機能自閉症(HFA)などで学習や生活面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒が通常学級において6.3%程度の割合で在籍している可能性が報告されて以来、さまざまな議論がなされてきている。改正学校教育法が2007年度から施行され、すべての学校において障害のある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導や必要な支援を行う特別支援教育がさらに充実していくことになった。

特別支援教育体制整備にはいくつかの課題があり、その1つに人材確保がある。2005年度から学習支援ボランティア派遣事業を開始し、学生をボランティア(以下、ボランティア学生)として小中学校に派遣している。

市教委において2008年度に実施した学習支援ボランティアに対する派遣校教員の意識調査では、「つまずきのある児童・生徒への個別支援」、「学習に集中できない児童・生徒への支援」、「一斉指導時の支援」、「児童・生徒の様子を(教師へ)伝える」などを派遣校教員はボランティア学生に期待していた。また、ボランティア学生も「ボランティア活動から得たものがあつた」と活動を肯定的に評価していた。つまり、派遣については両者共、概ね意義があるという結果になっている。

ボランティア学生派遣が定着しつつある現在、両者の連絡のあり方が課題となっている。それについてテキストマイニング分析を行ったので、ここで報告する。

2. 方法

(1) 研究協力者

1) 派遣校教師: ボランティア学生が派遣されている小学校23校、中学校10校に勤務する教師

1,170名であった。

2) ボランティア学生: 小学校へ派遣された51名、中学校へ派遣された22名、合計73名であった。

(2) 調査方法

派遣校教師、ボランティア学生共に質問紙調査法を用いた。

(3) 調査実施期間

1) 派遣校教師: 2008年6月下旬から7月上旬であった。

2) ボランティア学生: 2008年12月中旬から2009年1月上旬であった。

(4) 調査用紙の配布回収方法

派遣校先教師、ボランティア学生共に市教委の担当指導主事が小学校と中学校の校長会において、質問紙調査についての説明を行い、協力を依頼した。その後、学校毎に教師数分ボランティア学生数分を印刷して、封筒に入れ、市教委からその封筒を配布した。配布2週間後に市教委が質問紙を回収し、それを報告者の1人が受け取った。

(5) 統計分析法

自由記述内容をWordMiner(日本電子計算株式会社, 2000-2003)を用いて、テキストマイニング分析を行った。WordMinerはテキスト型データの探索的データ解析を行うものである。

3. 結果と考察

(1) 回収率

1) 派遣校教師: 小学校55.4%、中学校48.9%、全体で52.8%であった。

2) ボランティア学生: 小学校96.1%、中学校81.8%、全体で91.8%であった。

(2) 派遣校教師のボランティア学生との連絡について

全回答623と自由記述回答107の回答種別の回答数は、Table1の通りとなった。両者の回答種別回答比率はほぼ同じ傾向であると言える。自由記述回答を回答者属性である年齢別、男女別、派遣校種別に1要因分散分析にかけたところ、有意差が認められなかった(年齢別： $F_{4,102}=0.366$ ；男女別： $F_{2,104}=0.003$ ；派遣校種別： $F_{1,105}=0.428$, n.s.)ので、回答種別にテキストマイニング分析を行った。質的変数が4であるので、成分は3となる。

Table1. 派遣校別回答種別回答数 (%)

	はい	どちらでもない	いいえ	無回答
全回答	532 (85.4%)	60 (9.6%)	12 (1.9%)	19 (3.0%)
自由記述回答	97 (90.7%)	7 (6.5%)	1 (0.9%)	2 (1.9%)

注：%は小数第2位を四捨五入したので、合計は100%にならない場合もある。

それぞれの固有値、寄与率、累積寄与率は、成分1では、0.3370,61.87,61.87、成分2では、0.1099,20.17,82.04、成分3では、0.0978,17.96,100.00となった。テキストマイニング分析を行うことで得られる固有値とは、構成要素(自由記述内容を分かち書き処理を行い、そこから得られた統計分析が可能な要素)と質的変数(定性的データであり、ここでは回答種)のカテゴリとの関係の程度を示す指標の1つであり、各成分の情報的大小を表す。寄与率とは、固有値の総和に占める各成分の固有値の割合のことであり、値が大きいほど成分の寄与(情報量)が多いことを示す。累積寄与率とは、その寄与率を累積したものである。構成要素と質的変数の関係を布置図で示したのが、Figure 1である。図に示された通り、質的変数の回答種別のうち、「はい」は距離が0.02で、一番重心に近い。次が「どちらでもない(2.40)」、「無回答(6.18)」、「いいえ(40.49)」であった。

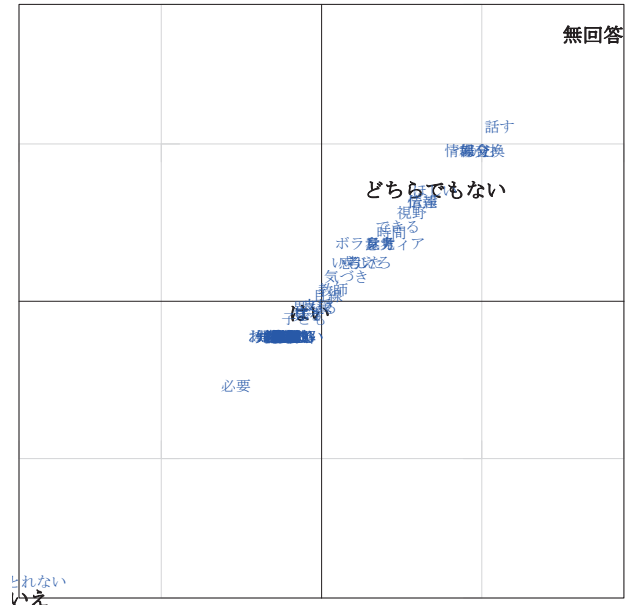


Figure 1. 構成要素と質的変数の関係

質的変数毎に構成要素の有意性検定を実施した結果はTable2に示す通りである。

Table2. 質的変数毎の構成要素有意性検定結果一覧

	記述内容	検定値	有意確率
はい	時間	-3.98	0.00
	取れない	-2.38	0.01
	視点	1.12	0.13
どちらでもない	時間	3.43	0.00
	つかむ	1.09	0.14
	取れない	1.09	0.14
いいえ	場合	1.09	0.14
	取れない	2.25	0.01
	時間	1.79	0.04
無回答	必要	1.55	0.06
	ほしい	2.06	0.02
	話す	1.52	0.06
	情報	1.08	0.14
	伝達	1.08	0.14

分析の結果、ボランティア学生が見た児童生徒の様子を知りたいが、情報交換の時間が取れないという意識が浮き彫りとなった。

学生の自由記述内容も同様の分析を行った。